

現場教員の語る教員養成と研修の課題

武田 信子

1. はじめに

学校教育がさまざまな問題を抱え、生きづまりの様相を呈している今、教員の資質の向上が教育界の喫緊の課題とされている。学校教育を支えているのは教員であり、その教員の質の保証が、学校教育の質の保証になる、と考えられているからである。そのため、文部科学省は、2010年1月から、教員の資質の向上を図るためのアイデアを公募し、一方で教員養成系大学などに調査研究を委託するなど、新たな対策を講じ始めた。

本稿は、教員の資質の向上に関する文部科学省科学研究費基盤研究B(海外)(課題番号21402041)「教員のコンピテンシーリスト開発と研修モデルの構築に関する国際協同研究」の一環として、教員の資質の向上を図るための条件について、現場教員が現在の日本における養成や研修の課題、成長の条件をどうとらえているか、彼ら自身の体験を踏まえて語ってもらうヒアリングの結果をまとめたものである。

2. 問題と目的

日本の教員はほぼ全員が大学、少なくとも短大卒であり、教員の子どもに対する教育熱心さや授業研究、子どもたちを統制する学級経営の技術は世界的に見ても高水準であると考えられる。また、教員という職業の神聖感が一般市民に期待としてある。しかし、社会環境等の変化は子どもたちの日常生活に変化をもたらし、子どもたちの成長発達にも影響を及ぼして、従来の学校教育のあり方はこれに対応しきれず、不登校、学級崩壊、小一プロブレムなど様々な問題が発生している。学校教育には変化が求められているが、課題は大きく、教員は、従来の形の教育では対応しきれない問題に苦悩している。新任教員のリアリティショック、ベテラン教員のうつ状態の増加、退職などはその表れといえよう。

それらに対して、これら各種の学校教育の問題

は一人一人の教員の質の向上によって解決ができるという立場、あるいは質の低い教員を矯正していくことによって問題を解決していくという考え方から、養成や研修を通して個人の資質開発を図っていく試み、具体的には教職実践演習や教員免許更新制、教職大学院の導入が実現し、教員養成期間の延長も話題に上がっている。また人事考課も取り入れられるようになった。

これらに対して、本研究では、教員の資質の向上は、教員個人が養成や研修の中で取り組む課題もさることながら、成長の要件は日本の学校システムや学校コミュニティの課題ととらえる視点が必要であると考えている。つまり、さまざまな資質を持った人材が教員養成を経て教員となり成長していくためには、自然に教員個人の成長が促されるような態勢が学校内外にシステムとして整えられていることが必要である、と考えている。

そこで、パイロット的に現場の先生方から、教員の成長を促す学校コミュニティの条件を探ることをヒアリングの目的とした。

3. 方法

時期：2009年11月～1月

時間：一名に対して約一時間

対象：都内及び近郊の小中高等学校で、優れた授業実践をしていると評価の高い教員三名及び優れた学校運営をしていると評価の高い校長とその学校の教員三名の計七名。

いずれも、教育委員会関係者や教師教育研究者から推薦を受け、リスナーは初対面、あるいはお会いしたことがあっても、話をしたことは初めての先生方であった。ヒアリング対象の選出には様々な基準が考えられるが、ここでは、パイロット研究としてゆるやかに「この先生は推薦できる」と教育関係者がそれぞれ一番に推薦する教員を対象とした。

リスナーは主に筆者であったが、(B)には科研研